

---

# 艦魂年代史外伝 恋する英雄王エンタープライズ

黒鉄大和

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

艦魂年代史外伝 恋する英雄王エンタープライズ

### 【Nコード】

N2440D

### 【作者名】

黒鉄大和

### 【あらすじ】

日米双方どちらにとっても長く苦しかった太平洋戦争は、日本の敗戦という結果で終戦した。世界はようやく平和になったのだ。戦場を生き抜いた歴戦空母『エンタープライズ』はようやく戦争を終え、後任のエセックス級空母に全てを任せて退役した。常にアメリカ軍の太平洋戦線の前線で戦い続けた少女は、ようやく平和を手に入れた。だが、それはつかの間の平和だった。退役した『エンタープライズ』に迫る解体処分。そんな彼女に、小さな出会いが起きる。一人の少年との出会いが、彼女の激動の生涯に一輪の花を咲き誇ら

艦魂年代史外伝 恋する英雄王エンタープライズ

せる。

## Chapter 1 エンタープライズの輝き（前書き）

今回は本編でアメリカ側の主人公として活躍したエンタープライズの物語です。

激動の時代を生き抜いた小さくも力強い戦姫に、小さな春が訪れます。

戦う事が全てという彼女と、そんな彼女を優しく包み込む少年。

二つの想いが交差する小さくも儂い物語。

艦魂年代史外伝シリーズ最終弾。どうか最後まで読んでください。

## Chapter 1 エンタープライズの輝き

太平洋戦争でアメリカを勝利に導いた物は数多くあるが、いくつが有名なものがある。

敵を早期に察知するレーダー。

敵機を次々に撃墜できた近接信管であるVT信管。

日本軍航空隊を壊滅させた撃墜王F6Fヘルキャット。

山本五十六連合艦隊司令長官搭乗の一式陸上攻撃機を撃墜したP

38ライトニング。

第二次世界大戦最高の戦闘機として称されるP 51ムスタング。

その圧倒的な性能で日本機を苦しめ、日本中を焦土にしたB 2

9。

そしてもう一つ、開戦当初から勇猛果敢な攻撃で日本機動部隊を壊滅させ、日本本土空襲にも一翼を担った 空母『エンタープライズ』。

大戦初期から日本機動部隊と激戦を繰り広げ、翔鶴型空母とは何度も死闘を行った『エンタープライズ』は二隻の姉妹艦を失いながらも壮絶な太平洋戦争を生き抜いた。

何度も日本機による特攻攻撃を受け、終戦の時は修理の為にドックに入っていた。

壮絶な太平洋戦争では日米共に多くの空母が海に沈んだ。

アメリカの空母も戦前に建造された空母のほとんどが沈没し、最終的には『エンタープライズ』の他に『サラトガ』『レンジャー』のたった三隻しか残らなかった。

ヨークタウン級空母二番艦・空母『エンタープライズ』は太平洋戦争最高の空母として二〇の従軍星章と他国籍艦艇としては唯一イギリス海軍ペナントを受章した。

そんな空母『エンタープライズ』は太平洋戦争を生き抜いたが、すでに新鋭空母としてエセックス級空母がいるので退役する事にな

った。

一九四六年一月十八日、『エンタープライズ』はニューヨーク海軍工廠に入渠してモスボール処置を受けた。

その後一九四七年二月十七日に退役した。

そんな歴戦の空母である『エンタープライズ』を記念艦として残そうとした運動が起きたが、結局資金は集まらずに解体される事になった。

ドックの中で『エンタープライズ』は、太陽に照らされる祖国の景色を見ながら解体の時を待ち続けていた・・・

第二次世界大戦・太平洋戦争という戦争を起こした世界は、終戦五年後に朝鮮半島を舞台に朝鮮戦争が勃発した。

人間は何度戦争を引き起こせば気が済むのだろう。

神様がいるとしたらそう思うだろう人間の愚かさ。

そんなまた新たに起きた戦争とは関係ない退役空母『エンタープライズ』の甲板には十四、五歳くらいの少女が一人たたずんでいた。短い金髪を風にゆらゆらと揺らし、蒼い瞳で蒼穹の空を見上げる少女はどこか寂しそうな顔をしていた。

どこまでも蒼く、どこまでも澄んだ大空を見上げ、少女は声掛ける。

「姉貴、ホーネット。元気にしてっか？ 私はまだこんな所で生き恥を晒してるわ」

苦笑いして言う少女は、どこか悲しげに瞳を揺らしていた。

「あんなだけの死闘を生き抜いたつてのに、私はもう退役。朝鮮半島で起きてる戦争にも参加できないなんて、情けないわね」

そう言っつて少女は悔しそうに唇を噛む。プライド高い彼女にとつて、祖国が戦争しているのにそれを見ている事しかできないのは屈辱以外の何でもない。

「エセックス達は朝鮮戦争に参加してるらしいけど、元気にしてっかな？」

大事な後輩達が危険な戦争に参加しているのに、大先輩である自分が参加できないなんて苦しみ以外何でもない。

「サラトガはアトミックボムの標的として、レンジャーもスクラップになっちまった。私もいずれ、ジャンクになっちまうのかな？」  
少女は悲しみに顔をゆがめてうつむく。

歴戦の戦士である彼女のプライドは、もうボロボロになっていた。長く苦しい戦いの中で姉や妹の他に多くの仲間を失いながらも生き抜いた彼女は、もう疲れ切っていた。

戦争が終結してもう五年経つが、彼女は疲れていた。

少女は蒼い大空を見上げ、小さな笑みを浮かべた。

「サラ。私にはもう何もできない。第二次世界大戦最高の空母として称された空母『エンタープライズ』の艦魂である私も、落ちぶれてしまったな」

そう悲しげに言う少女　エンタープライズは、どこまでも蒼い空の向こうに親友や姉、妹の姿を浮かべて悲しげに笑みを浮かべた。

日用品も全て取り外された旧艦長室に艦魂の力で発現させたベッドに横になっているエンタープライズは小さく寝息を立てていた。

かつてアメリカ合衆国海軍最強かつ勇猛と謳われたエンタープライズだが、こうして気持ち良さそうな寝顔をしていると、とてもかわいらしい女の子だ。

黙っていれば美少女なエンタープライズが少女の顔で眠っていると、クリーム色の髪をした少年が入って来た。

少年はベッドで静かに寝息を立てているエンタープライズを見て困ったように頭を掻く。

「なんだ、エンター寝てたんだ」

少年はため息してベッドに近づくとしゃがみ込み、視線を低くしてベッドで眠っているエンタープライズを見詰める。

かわいげな寝顔をしているエンタープライズを見詰め、少年は微笑む。

「こうしているとかわいいんだけどな」

優しげに微笑むと、急に顔を真っ赤にさせ、キョロキョロとまわりを見回し、誰もいないと確認すると、そっと手を伸ばし、エンタープライズの柔らかな頬をそっと触れる。

「や、やわらかいなあ・・・」

顔を真っ赤にさせたまま少年はエンタープライズの頬を触る。マシユマロのように柔らかく、ほんわりと温かい彼女の肌に少年は微笑む。

「う、う・・・ん」

「・・・っ!」

その甘い声に少年はドキリとする。

「・・・お、起きてない、よね?」

起きていないのを確認し、少年はそっと毛布を剥ぐ。

「おぶばッ!」

突如噴出した鼻血を少年は慌てて押さえる。

毛布の中は理想郷が広がっていた。

少年は慌ててティッシュを鼻に詰める。

「は、反則だよっ! 一から十まで軍人なエンターがこんな格好してるなんてッ!」

そう言っただけ少年は必死に視線を逸らす。だが彼も思春期の男の子、ついつい視線が向かってしまう。

エンタープライズは、白いフリルで装飾されたピンク色のネグリジエを着て眠っていた。

とてつもなくかわいい女の子の格好をした姿に、少年は視線を逸らしたまま手がそっと動く。

「うっつ! こんなかわいい格好をしているエンターが悪いんだ!

だからこれは正当行為だあっ!」

「貴様、一体何をやっている・・・」

「ひぎゃあああああっ!」

激痛と恐怖に顔をゆがめて振り返ると、そこには不機嫌そうに自

分を睨み付けているエンタープライズが、

「え、エンター？」

「再度問う。貴様一体何をしている」

まさか彼女の寝顔を見てニヤニヤしていたとはとてもじゃないが  
言えない。殺される。

この危機的状況を打破する為に、少年は満面の笑みで世界共通単  
語を放つ。

「は、ハロー？」

エンタープライズは無言で掴んでいる少年の手にさらに力を入れ  
る。

「い、痛い痛いッ！ 手が壊れるうッ！」

「次はないぞ」

鋭利な刃物のような鋭い瞳で睨み付けるエンタープライズに少年  
は恐怖するが、だが、その光景の中にちらりと理想郷が・・・

「あ、いや・・・」

「うん？ 何？」

突如少年が顔を真っ赤にさせて自分から視線を逸らすのを見てエ  
ンタープライズは不思議そうに首を傾げる。

「どうした？」

「あ、あのさ」

「何だ？」

「とりあえず、何か着てくれないかな？」

恥ずかしそうな彼の視線を追い掛けると、その先にはネグリジェ  
姿の自分が・・・

「なあっ！」

エンタープライズは顔を真っ赤にさせて慌てて毛布を着込むと、  
顔を赤く染めている少年を睨み付ける。

「き、貴様・・・ッ！ よくも私の恥ずかしい姿を見たなあッ！」

「ぼ、僕の責任！？ お前がそんな姿をしているからでしょっ！？  
そもそも何でお前そんな女の子らしい格好してるの！？」

少年の言葉にエンタープライズはさらに顔を真っ赤に染めて激怒する。

「私は女だッ！ 女の私が女の格好をしていて何が悪いッ！」

「変だろッ！ お前は軍服で寝てたんじゃなかったの!？」

少年の言葉にエンタープライズは頬を赤く染めながら「私の勝手だろ」と言っつてそっぽを向く。

「戦中は忙しくて軍服で寝るなどの不規則な生活をしていたが、今の私は退役した身だ。普通の生活をして何が悪い」

「いや、悪いって訳じゃ、ないけど・・・」

困ったように少年が頭を掻くと、エンタープライズは拗ねたように唇を尖らせる。

「ふ、ふんっ。こんな男女が女物の服を着ても似合わないか」

「え？ いや、そんな事ないよっ！」

「うそを言うなっ！ 私だっつてわかってる。こんな私がこんな服を着ても似合わないなんて事、わかってるさ」

自分の中で自分の容姿を否定するエンタープライズに少年は慌てて叫ぶ。

「そ、そんな事ないよッ！ 似合ってるし　すごく、かわいいよ」

恥ずかしそうに言う少年に対しエンタープライズも顔を真っ赤に染める。「な、何をバカな事を・・・ッ　！ 冗談も休み休み言えッ！」

「冗談じゃないよっ！　本当にかわいいってばっ！」

自分の言った事に頬を赤く染める少年だが、エンタープライズはそれよりももっと顔を真っ赤にしている。

「ほ、本当、か？」

「う、うん」

「・・・」

「・・・」

「・・・そ、そんなにジロジロ見るな。恥ずかしい」

「あ、ご、ごめんっ！」

慌てて視線を逸らすと、少年は部屋を出ようとドアに向かう、が、「ど、どこへ行くんだ？」

いつの間にか軍服の上着を着込んだエンタープライズが彼の横に立っていた。そんな彼女を見て少年は顔を真っ赤に染める。

「そ、その格好は、一体？」

「寝巻き姿のままうるつく訳にもいかないでしょ」

そう言って頬を染めるエンタープライズ。その格好はネグリジエの上に背広・・・余計恥ずかしい。

「あ、あのさ、とりあえず着替えてくれない？ 僕外で待ってるからさ」

「わ、わかった」

エンタープライズは「さっさと出てけ」と言っただけ少年を外に締め出すと、慌てて軍服を着る。

先程までの少女っぽい姿はどこかへ行き、歴戦の軍人の顔になったエンタープライズは優雅に扉を開ける、が、

「待たせたな。さあ、行こう って、あれ？」

そこに彼の姿はなく、慌てて見回すと、自分から少し離れた所に彼の背中を見つけた。

「お、おい待てクーゴッ！」

結局少女モードになってしまったエンタープライズは慌てて彼クーゴの背中を追いかけた。

## Chapter 2 ディステイニーエンカウンター

かつてアメリカ合衆国海軍艦魂最強と謳われたエンタープライズだが、今ではその影はなりを潜めている。

あの頃の彼女を知っている者にとって、今の彼女を見ると満場一致で「牙を抜かれた虎」と答えるほど、彼女は変わってしまった。

それが大きく変わったのは一九四五年八月十五日、太平洋戦争が終戦したあの日から変わってしまった。

復讐の為だけに戦い続けた戦士であるエンタープライズだったが、この瞬間、その復讐は終わってしまった。

まだ日本人は生きている。そいつらみんな皆殺しにしないと気が済まない怒りを放っていたが、終戦してしまっただけでもうそれも果たせない。

行き場のない怒りに気が狂いそうになり、後輩であるヨークタウンやホーネットに暴走を止められたりもした。

そして九月二日、日本の東京湾に停泊した戦艦『ミズーリ』の甲板で降伏文書調印式が行われた際、エンタープライズは日本戦艦・戦艦『ナガト』の艦魂と会い、言い争いになった。

あれ以来、日本を攻撃できなくなったエンタープライズは生きる希望を失い、まるで妹・ホーネットを失った時のようになってしまった。

そんな希望を失ったエンタープライズの下に、彼が現れた。

月明かりの下、防空指揮所ではーっと空を見上げるエンタープライズに少年は優しい笑顔で優しく声掛けた。

「君が、エンタープライズ？」

その声にエンタープライズは振り向くと、ここで初めて二人は互いの顔を見合った。

「貴様は？」

「僕の名前はクーゴ・F・フォックス少尉。初めまして」

「今頃こんな老兵に一体何の用だ？」

「何の用だ、と言われても、配属されたから・・・」

その返答に、エンタープライズは呆れたような顔でクーゴを睨む。

「戦争はもう終わってしまったのだぞ？　なのに貴様のような子供

がこんな所にいるのはおかしいだろ」

「子供って、君の方が子供じゃない」

「殺すぞ」

「リアルで怖いんだけど・・・」

目が本気っぽかったのでクーゴは笑って誤魔化すが、エンタープライズはそんな事などどうでもいいのか彼を無視して星空を見上げる。

そんな彼女を見てクーゴは話し掛ける。

「あ、あのさ、フェイト・J・フォックス少佐って知らない？」

「誰だ？ そいつは」

「空母『ヨークタウン』の主計長をやってる人なんだけど」

「ああ・・・、そういえばよくヨークがそんな名前を言ってたな」

「それ、僕の兄さんなんだ」

「それで？」

「兄さんがそのヨークタウンから君が元気がなくて困ってるって聞いたからさ」

エンタープライズは「あのおしゃべりめ」と小さくつぶやいた。

「それで、『エンタープライズ』に配属されたからさっそく話してみようと思っただ」

「それはご苦労だな。だが生憎、私は貴様のような子供に心配されるほど落ちぶれてはいない」

「本当に素直じゃないんだ」

「・・・それもヨークが言ってたのか？」

「うん」

今度ヨークタウンを殺そう。そんな固い決意を胸に秘め、エンタ

「エンタープライズは再度クーゴの顔を見詰める。

「まあ、こんな老兵に配属されるとは、貴様の運もこれまでだという事だな」

「そっかな？ 老兵なんて全然思わないけど」

「貴様の目は節穴か？ こんなサビだらけのもう使い道もないおんぼろ空母が老兵でないなら何だ」

「そっやって自分を卑下するのはやめなよ。君は太平洋戦争最高の空母の艦魂でしょ？」

「そんな昔の事は忘れた」

「昔って、ついこの前の事でしょ？」

エンタープライズは何かと自分に反応してくるクーゴをうつつとうしく思い、スツと立ち上がると彼に背中を向けた。

「ど、どこへ行くの？」

「私の勝手だ。貴様にいちいち話す義理はない」

「いいじゃん。友達でしょ？」

「誰が友達だ。英雄である私と凡人である貴様が対等な立場になれる訳がないだろうが。それに私は無益な馴れ合いはごめんだ」

そう言っただち去るエンタープライズの手をクーゴは慌てて掴む。

「ちよ、ちよっと待ってよっ！」

「ぶ、無礼者！ 汚い手で私に触れるなっ！」

必死に暴れて抵抗するエンタープライズだが、暴れる事に夢中になり過ぎて・・・

「うわっ！」

「えっ!？」

バランスを崩してクーゴもろとも転倒した。

床に背を向けて倒れるエンタープライズ。そしてそんな彼女を押し倒すような形で上にのるクーゴ。

「あ・・・」

「くう・・・っ」

目の前に互いの顔が急接近し、二人の頬を互いの吐息がくすぐる。

心臓をドキドキさせてエンタープライズを見詰めるクーゴ。かわいい。

そう確かに思った。

流れる金髪に海の蒼のような碧眼。恥ずかしさから桜色に染まった頬。

どれも全てがいと美しい。

このまま近づけばキスだってできてしまふ距離だ。

「あ、あの・・・」

「いい加減私から離れろッ！」

そんな桃色ムードも彼女の前では無力。怒り狂ったエンタープライズは全力でクーゴの股間を蹴り上げた。

「ぐぎゃあああああああああッ！」

この世のものとは思えない壮絶な絶叫が天空高く響き渡った。

股間を押さえて悶絶するクーゴを顔を真っ赤にしたまま肩で息をしながら睨み付ける。

「お、お前・・・ッ！ 僕の切ない所を・・・ッ！」

顔を真っ青にして睨むクーゴの頭の上にエンタープライズは足を置く。

「この英雄王によくも無礼な態度をしたなッ！」

「ふ、普通自分の事を自分で英雄王なんて言うか？」

「やかましいッ！」

再びクーゴの股間に渾身の蹴りを入れると、クーゴの顔色は青白から土気色に変わる。

「あががががッ！」

必死に股間を押さえようとす手を弾き、エンタープライズはクーゴの股間を踏み付ける。

「土下座して謝るなら許してやってもいいぞ？」

口元を吊り上げて笑うエンタープライズに対し、クーゴは泣きながら何度もうなずく。だが、その必死な姿がかわいらしく・・・  
「もつと鳴けッ！」

「ひいひいひいっ！」

股間を踏み付けるエンタープライズの中でSの属性が覚醒していた。

「泣き叫べば許してやる」

「ごべんなはいっ！ 僕がわりゆいかりやっ！ もう僕のしえつない所を踏まにやいでくだしやいッ！」

「よしッ！」

ようやく解放されたクーゴは泣きながら股間を押さえてうずくまる。そんな彼を見て腹を抱えて大笑いするエンタープライズ。

「はははっ！ ちょ、ちょっと待ってっ！ は、腹が痛いッ！ 息が、息ができないっ！」

いつの間にか転げ回って大笑いする彼女の目の縁にはうっすらと涙まで浮かんでいた。

一方命の危機を感じるクーゴはそっとほふく前進して逃げる、が、「どこに行くつもり？」

「ひいっ！」

恐怖に顔をゆがめたクーゴがそっと振り返ると、そこにはなぜかムチを構えた英雄王が。

「まだまだ夜は長い。一緒に楽しもうじゃないか」

「遠慮しますッ！ 死んじゃうもんッ！」

「安心しろ。少しくらいは歴史に残るかもしれんぞ？」

「嫌だあっ！ 少年が神話になるのは嫌だああああっ！」

「エ アネタはやめろって」

泣きながら死を恐れるクーゴ。

さすがにここまで来ると罪悪感が胸を痛め始めたエンタープライズ。

「冗談だ。本気にするな」

「目が本気だったもんッ！ 時間切れで完全に全機関沈黙した後、『殺してやる殺してやる殺してやる』って言ってる時の目だったッ！」

「だからエ アネタはやめろッ！ わかる人が限定的過ぎるわッ！  
完全に怯えるクーゴにエンタープライズはムチを消してそつと手  
を差し伸べる。」

「立てるか？」

「・・・この手を掴んだら、殺すの？」

「もういいから。立てるか？」

「う、うん」

クーゴは怯えながらそつと立ち上がる。そんな彼を見てエンター  
プライズは謝る。

「すまん。少しやり過ぎた」

「安心させた所を一気に突き落とすの？」

「・・・素直に謝っているうちに納得しろ。じゃないと殺すぞ」

「納得します。納得するから殺さないで」

必死になつて首を縦に振るクーゴを見て、エンタープライズは小  
さく笑みを浮かべた。

おもしろそうにくすくすと笑うエンタープライズを見て、クーゴ  
は小さく首を傾げる。

「な、何で笑つてるの？」

「いや、こんなに笑つたのは久しぶりだなあつて思つてさ」

「そうなの？」

「戦争が終わつてからはいつも一人だったからね。戦時中は姉貴達  
やエセツクス達といつも一緒にいたから笑いは絶えなかつたな」

昔の楽しかつた頃を思い出し、エンタープライズは優しげに小さ  
な笑みを浮かべる。

月明かりに照らされるエンタープライズの優しげな笑みに、クー  
ゴはドキリとする。

じつと自分を見詰めるクーゴの視線にエンタープライズが気づく。

「何だ？ 何か顔に付いているのか？」

「う、ううん」

慌てて視線を逸らすクーゴにエンタープライズは不思議そう見詰



「エ アンゲリオンから離れるおおおおおっ！」

星空煌く月明かりの下、少年の悲鳴、少女の怒号、そして銃声がいつまでも響き続けた。

これがエンタープライズとクーゴの初めての出会いであった。

### Chapter 3 ホワイトクリスマスの想い

それから二人は親友のような関係になった。

ずっと戦争を生きて来たエンタープライズにとって、クーゴとのひとは平和を体で感じられる貴重な時間となっていた。

しかし二人が初めて出会ってから一年後、空母『エンタープライズ』は退役し、兵達はそれぞれ別の艦に異動となり、クーゴも空母『ホーネット』に配属された。

別れを惜しむクーゴに対し、エンタープライズは「私のもう一人の妹をよろしくな」と言い、敬礼して見送った。

根っからの合衆国海軍軍人であるエンタープライズらしい別れであった。

エセックス級空母四番艦にしてエンタープライズがもう一人の妹と言った空母『ホーネット』の艦魂はエンタープライズの知り合いであるクーゴにすぐに懐いた。

クーゴもホーネットには優しく接し、それに暇さえあればエンタープライズに会いに行ったりもした。

そうして二人は遠距離ながらも次第に心を通わせていった。そして

「エンター。僕は君が好きだ」

「・・・は？」

突然言われた言葉にエンタープライズは啞然とした。

時は九一五二年の終わりのある雪の日。世間ではクリスマスイヴを楽しんでいる頃、ドックに入っている退役空母『エンタープライズ』の甲板で大尉に昇級したクーゴとエンタープライズが二人して降り積もる雪を見詰めていた。

まじめな顔で言うクーゴにエンタープライズは顔を真っ赤に染める。

「ば、バカを言うな」

「僕は本気だ」

真剣な瞳を向けるクーゴはいつしか少年から青年に成長していた。昔よりもずつとかつこ良くなったクーゴを見てほとんど昔のままのエンタープライズは頬を赤らめながら不機嫌そうに吐き捨てる。

「ば、バカも休み休み言え。恋愛感情など戦場では役に立たんどころか足手まといだ」

「ここは戦場じゃない」

「わ、私は軍人だ！」

「僕はそうだけど、君はもう退役軍人でしょ？」

『ホーネット』に異動してから五年、クーゴはエンタープライズの言葉に反撃できるほどたくましくなっていた。今ではもうエンタープライズの蹴りだって簡単にかわせてしまう。

エンタープライズは「ば、バカバかしいッ！」と言って視線を逸らす。

「エンターは、僕の事が嫌いか？」

「そ、そういう問題ではない！」

そう言うがエンタープライズの顔は赤い。

嫌いなはずがあるか。嫌いなもんか・・・私は

心に秘めた感情に、エンタープライズは胸倉を掴む。

自分の中にいつの間にかできた感情を、エンタープライズは認めなかった。

胸を焦がすこの想いは、きつと違う。そう思っていた。だが、好きと言われた時、なぜか嬉しくて仕方がなかった。

自分の中で沸き起こる感情に、エンタープライズは戸惑い続けた。太平洋戦争を生き抜き、合衆国海軍最強の艦魂と謳われたエンタープライズも、今はもう昔の研ぎ澄まされた秀囲気はなく、一人の少女のものになっていた。

しかし、それを認めないのはプライド。

合衆国海軍最強と謳われ、根っからの合衆国海軍軍人であるエン

タープライズは艦魂である前に軍人である。

ずっと戦いしか自分の居場所がなかった彼女にとって、新たにできた自分の居場所はとても心地よい所だ。

しかし、自分は英雄空母『エンタープライズ』の艦魂。英雄なら英雄らしく国の為にその命を捧げ、国を守る為に命を投げ出さなければならぬ。

なのに、今の自分は国以上に彼を想っている。それが彼女を苦しめた。

軍人としての自分と、少女としての自分が、彼女を苦しませている。

そんな彼女を心配げに見詰めるクーゴの視線に、エンタープライズは決して避けられない現実を言い放った。

「そ、そもそも私は艦魂で貴様は人間だ。決して交わる事はない」

エンタープライズにもっともな意見に対し、クーゴは首を振った。

「愛があれば、人間と艦魂は一緒になれる」

「う、うそを言うな」

「うそじゃない」

「じゃあ、具体例を挙げてみる。そんなものは存在しないだろ」

エンタープライズは勝ったと思った。

十四年生きてきたが、いまだかつて合衆国海軍でそのような戯言を聞いた記憶は一切なかった。

具体例を挙げると言われてもそんなものは存在しない。

結局人間と艦魂が交われる訳はないのだ。

だが、エンタープライズの言葉に対し、クーゴはそつと月を見上げた。

「僕がこうして告白したのは、ある理由があるからなんだ」

「理由・・・だと？」

「君にはただ出張って言うてたけど、本当は僕、先月まで日本にいたんだ」

「な、何だとツ！？」

エンタープライズは驚愕する。

クーゴは先月までの三ヶ月間出張に出ていた。行き先は明かしてくれなかったが、まさか……

「に、日本だとツ!?」

「うん」

クーゴの言葉に対し、エンタープライズは顔を凶悪にゆがめ、牙を向ける。

日本はかつての敵。彼女は今でも敵と思っている。それに、日本は姉や妹や多くの仲間達の仇である。

エンタープライズはクーゴが今まで見た事がないようなすさまじい激怒でクーゴの胸倉を掴んだ。

「貴様ツ！ 日本などに行っていたのかッ！」

エンタープライズのすさまじい怒号にも、クーゴは動じずにうなずく。

「日本の防衛機関である警備隊との交流の為にね」

「日本人はみんな敵だッ！ あんな奴ら、皆殺しにしてしまえばいいのに、トルーマン（アメリカ合衆国第33代大統領 ハリー・

S・トルーマン）はそれをしなかったッ！ そんな外道どもの国に、貴様が行ったのかクーゴッ！」

「日本人はいい人ばかりだった」

「愚か者ッ！」

エンタープライズの放った平手がクーゴの頬を叩いた。だが、クーゴは何も返してこない。ただ言葉で、

「日本が戦ったのは軍部の暴走だ。日本国民全てがアメリカと戦う事を望んだ訳じゃない。それに日本はアメリカの圧力に対して戦争を起こした。悪いのは僕達アメリカだ」

その言葉に、エンタープライズの中のある記憶がよみがえった。

それは一九四五年九月二日、東京湾に浮かぶ戦艦『ミズーリ』艦上で行われた日本国降伏文書調印式での事、唯一稼動可能状態であった日本戦艦・戦艦『ナガト』の艦魂が言った言葉と、クーゴの言

葉が重なった。

悪いのはアメリカの方

エンタープライズは過去の忌まわしい記憶と、今日の前で起きて  
いる事に憤りを感じる。

「悪いのはジャップだッ！ 私達アメリカ合衆国は世界を守る正義  
の国だッ！ そんな私達の祖国が過ちなど犯すものかッ！」

必死になって叫ぶエンタープライズを、クーゴは悲しげに見詰  
める。

「君は祖国を愛している。愛しているからこそ、祖国を信じたい。  
だけど、国はいつも正しい事をしている訳じゃない。間違っ  
た行いもしてきた。それがあの戦争なんだ」

「違うッ！ 悪いのは日本だッ！ 日本が悪いんだッ！」

「確かに、日本も悪い。でもアメリカも悪い。戦争というのは、ど  
ちらが正義で、どちらが悪だと決まっ  
てはない。どちらも正義を信  
じて戦う。戦争とは、正義と正義がぶつかる国同士の争い。戦争を  
した国は、どちらも被害者であると同時に、加害者でもあるんだ」

クーゴの言葉を、エンタープライズはいつの間にか涙を流しながら  
ら首を大きく振って否定する。

「世界の正義であるアメリカが絶対なんだッ！ あんなクズ島国の  
正義など悪でしかないッ！ 日本はドイツと同じ世界の悪だッ！」

「エンター。話を聞け」

「日本なんて、日本なんて、殲滅すれば良かったんだッ！ もう騎  
士道なんて無視して、二発だけじゃなくて、ありっただけのアトミッ  
クボムを日本中にバラ撒けば良かったんだッ！」

「エンターッ！」

鋭い音と共に、エンタープライズの頬に痛みが走った。

呆然と手を当てると、じんわりと熱を放っている。

「く、クーゴ・・・お前・・・」

エンタープライズはクーゴにビンタされた事に驚愕する。

彼は自分から手を上げるような人間ではないからだ。

クーゴはやつと冷静になったエンタープライズを諭すように、口を開く。

「エンター。まずは僕の話聞いて」

クーゴの声に、エンタープライズは小さくうなずく。

「日本に行った僕は、ある日本人と出会った。警備隊士官のシヨウキハセガワっていう人でね、元日本海軍軍人で少佐だった人なんだ。その人が開戦からずっと乗っていた艦は、大戦の終わりに君が沈めたんだ」

「わ、私が？」

「うん。もつとも、君だけじゃない。ヨークタウンやホーネット、エセックスだって参加したんだけどね。その沈んだ艦は、日本海軍が世界最強を目指して極秘に建造した、日本海軍の象徴である超大型戦艦」

「戦艦『ヤマト』」

「うん」

エンタープライズは拳を握った。

かつて自分が沈めた日本海軍の誇る超大型戦艦

戦艦『ヤマト』

日本や日本人、そして日本艦艇を嫌った彼女が唯一同情した日本の戦艦。

艦載機の搭乗員達が「美しい戦艦だった」と言っていた、本当は沈めたくはなかった日本戦艦。

うつむくエンタープライズに、クーゴはそつと口を開く。

「その『ヤマト』に乗っていたシヨウキは、『ヤマト』の艦魂と両想いだったそうだ」

その言葉に、エンタープライズの胸がズキリと痛んだ。

「お互いを愛し合い、ずつと一緒にいたいと願った二人。そんな二人のまわりには大勢の艦魂がいた。そんな艦魂達も戦争で次々に消え、最後は愛するヤマトさえも失ってしまった。彼は後悔した。ずつと一緒にいようって思ったのに、自分一人だけが生き残ってしまった

った事を、すごく悩んでいたそうだ」

「なら、残ればよかったのに、なぜ生き残った」

エンタープライズの震える声に、クーゴはそつと言った。

「『生きてほしい』。そう言って、ヤマトは彼を別の艦に転送して生き残らせたそうだ」

クーゴの言葉に、エンタープライズは沈黙した。

日本人は敵だと、そう思っていたが、こうして目の前に日本人の一つの悲惨な物語を持ち出されると、自分がやって来た行為に疑問が生まれる。

本当に、自分が今までしてきた事は正しかったのか

そんな疑問と、自分がした攻撃で一つの儚い愛の物語が壊れてしまったという現実が、彼女の胸を痛めた。

「わ、私は・・・」

「もちろん君を責めている訳じゃない。でも、今でも彼は彼女の事を想い続けている。一緒にいられる事はできなくなってしまったが、それでも、いつでも彼女が傍にいる。それを励みに今まで生きてきたそうだ」

クーゴはうつむくエンタープライズの肩の上にそつと叩いた。その手にエンタープライズは顔を上げると、そこには優しい彼の笑顔が、

「シヨウキとヤマトの物語があるように、僕と君の物語があってもおかしくはないだろ？」

「クーゴ・・・」

クーゴの諭すような言葉に、もはやエンタープライズは牙を向ける力も失ってしまった。

うつむいて沈黙するエンタープライズの肩を、クーゴはそつと抱いた。

艦魂なので雪の積もらぬエンタープライズと違い、クーゴの肩には白い雪が積もっていた。

寒いだろうに。

エンタープライズは寒空の下で自分を温めるクーゴを見て、頬を赤らめた。

本当は自分の方が寒いだろうに、それでも彼は自分を抱き締める。クーゴは上目遣いに自分を見上げるエンタープライズに、クーゴはそつと微笑む。

「僕は真剣に君を愛してる。それは変わらない事実だから。ずっと一緒にいたいって思うし、ずっと守ってあげたいとも思ってる」

月明かりの下、幻想的な雪景色に包まれた甲板の上で、クーゴは自分の想いを打ち明けた。

エンタープライズはそんな彼の腕の中で何も答えずにうつむく。そんな彼女を見てクーゴは苦笑い。

「まあ、君が嫌だって言うなら俺は無理に強要はしないよ。嫌だったら、僕を突き飛ばせばいいだけだし」

そう言つてクーゴはエンタープライズを見詰めるが、彼女は何も言わずに腕の中に納まっている。

「エンター？」

「・・・いつまでも、一緒にいられる訳ないだろ」

「え？」

顔をもたげたエンタープライズは真剣な表情で彼を見詰めていた。  
「エンター・・・お前・・・」

エンタープライズはそつとクーゴの腕から離れると、そつと月を見上げた。その瞳は悲しそうに濡れていた。

「私の命は、そう長くはない。戦いの中でしか己の輝きを放てない私は、戦いが終われば何もできない。英雄王と謳われた私も、今は近い将来必ず来る死期を受け入れ、ただ待つしかできない身だ」

変えられぬ運命を受け入れるしかできない戦姫を、クーゴは悲しげに見詰める。

「いずれ解体されるのを待つしかできない私は、現世に留まり続ける事はできない。だから」

月明かりの下、流れる星の川のような金髪を輝かすエンタープラ

イズは、悲しげな笑みでクーゴを見詰めた。

「私のような無力な女に恋するのはやめる。もう私の事は忘れて、立派に生きてくれ」

エンタープライズの言葉に、クーゴは小さく首を振る。

「君を忘れる事なんかできないし、君への想いを消す事なんてできない」

自分の願いを聞かないクーゴにエンタープライズは叫ぶ。

「私はクーゴの為に言っているのだッ！ クーゴは私と違って自由の身なのだゾッ！ それなのに、なぜ自由なく死ぬしかない私を選ぶッ！ 貴様には貴様の未来があるのだろウがッ！」

必死になって叫ぶエンタープライズの瞳からは、一筋の雫が流れ  
ていた。

拭く事もせずに泣き叫ぶエンタープライズ。

「こんな女らしくない私など放つとけば」

それ以上の言葉は彼女の口からは出なかった。

目の前に広がるのは桜色に染まった彼の顔。その近すぎる距離と自分の唇に押し付けられた優しい感触に、エンタープライズの顔は真っ赤に染まった。

クーゴの唇で自分の唇を塞がれたエンタープライズは必死になって彼の胸を押して彼を離そうとするが、なぜか徐々に力が抜ける。まるで唇から力を吸い取られているかのように。

いつしか必死になって彼の胸を叩いたりして動いていたその手は、ただしなだれるだけになっていた。

エンタープライズの力が抜け、ほとんど立っていられなくなった頃、ようやくクーゴは唇を放した。

キスが終わると、そこにはぐったりと自分にしなだれ掛かる彼女の姿が、

「エンター？ どうしたの？」

「き、貴様という奴は・・・」

自分のした事に自覚のないクーゴを睨み付けるが、すでにその口

から出た声は力なく、どこか色っぽい。

もはや反撃する力もないエンタープライズを、クーゴはそっと抱き締める。

「僕はお前が好きだ。できる事なら、君にも僕を好いてほしい。君の気持ちを聞かせてくれ」

そう言うクーゴを、エンタープライズは残った力を振り絞って睨み付ける。

「それが人の唇を奪ってから言うセリフかッ！」

「まあ、順番はおかしいけど、いいじゃない」

「良くないッ！ 返せッ！ 私の初めてを返せッ！」

「あれ？ もしかしてファーストキスだった？」

「う、うるさいッ！」

力が入らないエンタープライズの放った弱々しい拳は簡単にかわされてしまふ。

顔を真っ赤にして怒る彼女を見て、クーゴは嬉しそうに小さく微笑む。

「男らしいお前もいいけど、やっぱりこうして女の子らしい反応をするお前が一番だよな」

「う、うつつうるさいッ！」

もっかつて英雄王などと呼ばれていたあの勇ましさはどこにも残っていないかった。あるのは不器用な恋しかできない少女だけ。

そんな可愛らしいエンタープライズに、クーゴはそっと微笑むが、真剣な瞳を彼女に向ける。

「言っておくけど、僕は君の事を愛してる。それはこれからだって変わる事はない。例えハッピーエンドのない物語になるかもしれない。君と一緒だった時間は、僕の中で大切な宝物になってるんだから」

そう言って微笑むと、エンタープライズは頬を朱色に染めて視線を逸らす。

しばしの沈黙が流れ、やっとの思いで出た言葉は、  
「バカ者・・・」

小さな小さな素直じゃない言葉だった。だが、クーゴはそれで十分だった。

クーゴはそつとエンタープライズを抱き締める。

一切の抵抗はなく、エンタープライズはされるがままになっている。そんなエンタープライズを抱き締めながら、クーゴは少し不安げに聞く。

「なあ、エンターは僕の事好き？」

その邪心なき純粋な気持ちでの質問に、エンタープライズは顔を真っ赤に染める。

「そんな訳ないでしょッ!? 私が貴様みたいなへらへらした奴に好意などという腐敗した感情を抱くわけないでしょッ!？」

素直じゃないエンタープライズの必要以上に力強い否定に、一瞬にしてクーゴの顔から笑みが消えた。

そつと、エンタープライズを抱き締めていた力が解かれる。その突然の状況変化にエンタープライズは戸惑う。

「え? クーゴ?」

「しゅみましえん。調子に乗ってました」

そう言つてクーゴは座り込むと、雪の上に《の》の字を書き始めた。日本に行った際に覚えた行為である。

どんよりとした重苦しい雰囲気を出しながら永遠とひたすら《の》を書き続けるクーゴははつきり言つてキモイ。だが、普通ならここで元気付けるのだが、この少女は・・・

「何よ。そんなふざけた行動に何の意味があるというのだ? はつきり言つてキモイ」

はつきり言いすぎです。

あまりにもひどい言葉にさらに一・五倍速で《の》を書き続けるクーゴにエンタープライズは視線を逸らす。

「バカじゃないの? 私の気持ちくらい、わかってくるくせに・・・

先程までの刺々しい雰囲気は一切なく、純粹にむすつとする女の子の表情をするエンタープライズは小さくつぶやいた。

「エンター……」

本当なら聞こえるはずもない小さな声も、クーゴはちゃんと聞き取った。

いまだ頬を赤らめながら視線を逸らすエンタープライズを、クーゴは再び抱き締める。

今度も、エンタープライズは一切抵抗しなかった。

小さく、折れてしまいそうな小さな体に、一体どれだけの想いを抱いて戦い続けて来たのか。それは誰にもわからない。

でも、今ここにいる彼女はもう昔の彼女ではない。

戦いに疲れ、誰かに支えてもらいたいと心の底で願う、どこにもいる少女でしかない。

エンタープライズは自分を抱き締めるクーゴを、そっと抱き締め返した。

温かい……とても、優しい温度……

心の底にある氷をそっと溶かしてくれるような、そんな優しくも温かいぬくもりに、エンタープライズは自然と笑みを浮かべた。

何の障害もない、純粹な笑み。

今までの人生の中で、こんなにも心の底から笑みを浮かべた事はほとんどない。

姉や妹と初めて会った時、心の底から信頼できる仲間ができた時、それくらいしかなかった。

そんな自分の本当の笑みを引き出した彼に、何か温かい感情が湧き上がるのを感じた。

「クーゴ……本当に……私なんかでいいのか？」

そんな自信なさげな言葉に、クーゴは優しく微笑んだ。

「もちろん。君がいい。君じゃなきゃ、僕は嫌だ」

「クーゴ……」

心の底から嬉しくなり、今度はエンタープライズから目を閉じ、唇を彼に向けた。彼もそれに応えて口を近づけ、重なった。彼から温かい何かが口を伝わって流れ込んでくるを感じながら、エンタープライズは心の中で思った。

これからは、もう少し素直に生きてみよう・・・

そんな小さくも彼女には大きな決意は、彼女を神々しく輝かせた。時計の針が頂点からずれても、二人は互いに唇を合わせ続けた。クリスマスイヴとクリスマスをまたがった二人の愛に応えるように、美しく白く輝く雪はいつまでも抱き締め続けた。

## Chapter 4 本当の気持ち

一九五五年、とうとうゆっくりとだが、空母『エンタープライズ』の解体が始まった。

かつて日本海軍を苦しめた艦載機を発艦させていた飛行甲板は連日の解体作業ですでに一部が解体されていた。

次第に解体される甲板の上で、エンタープライズは空を見上げていた。

そして今日も、エンタープライズは甲板に現れた彼の姿を見て歓喜した。

「クーゴツ！ 久しぶりッ！」

「久しぶりッ！」

先日少佐に昇級したクーゴは襟に佐官の階級章を付けている。それを見て相変わらず素直じゃないエンタープライズは苦笑いする。

「なんだ。やっと昇級したのか。遅いな」

エンタープライズの言葉にクーゴは苦笑いする。

「そんな無茶な。今は戦時中じゃないんだよ？ そう簡単に昇級できないんだってば」

「言い訳のつもりか？」

くすくすと笑うエンタープライズにクーゴは呆れたように笑う。

「相変わらず素直じゃないね、エンターは」

もう慣れっこになってしまったクーゴに対し、エンタープライズは頬を赤く染めてそっぽを向く。

「悪かったな。素直じゃない女で」

「別に、僕はそんなエンターも含めて好きだから」

「・・・」

何気なく普通に言った彼のセリフに、エンタープライズは頬を赤く染める。

邪心のない笑みに、エンタープライズは完全に毒気を抜かれてい

た。

最近では主にクーゴに主導権を握られる事が多くなってきた。彼だつて無駄に年を取っている訳じゃない上に、元々結構抜けている所があつたが、それも最近ではかなり磨きが掛かっている。

クーゴの何気ない言葉一つ一つがエンタープライズの心を揺らすのだ。

「まったく、貴様という奴は・・・」

「それが一ヶ月ぶりに会つた恋人に言うセリフか？」

「恋人になつた覚えはない」

「・・・普通恋人でもない奴に唇を奉げるか？」

痛い所を見事に突くクーゴの切り返しにエンタープライズは咆哮する。

「う、うるさいッ！ 黙れ黙れ黙れッ！」

「逆ギレするなよッ！」

こんな日々を二人はずつと過ごしてきた。

雨の日も、風の日も、雪の日も、暇さえあればクーゴはエンタープライズに会いに来た。

残り少ない彼女の命を、最高のものにしようと、彼は必死になつていた。

「お前、疲れていないか？」

「えへへ、そりゃ仕事がつついからね」

「うそを言うな。私は知っている」

「何を？」

エンタープライズは不機嫌そうな顔でクーゴを睨んだ。

「『エンタープライズ保存会』というのが全米中から資金を集めているそうだな」

「そ、そうみたいだね」

クーゴは何かを誤魔化すような仕草をするが、エンタープライズはさらに追撃する。

「お前も、そこに入っているのだろう？」

「・・・」

返事はない。だが、エンタープライズは引かない。

「入っているのだろうか？」

「そ、それは・・・」

「正直に言え。当人に内緒にする奴があるか」

エンタープライズの有無も言わせない迫力に負け、クーゴはうなずいた。

「そうだよ。僕は保存会に入ってる。それも幹部にね」

「やはりな。最近どうも会う回数が増え階級に対して少ないと思っていたが、そんなバカな事をしていたのか」

「ば、バカとは何だよッ！ 僕はお前を生かそうと必死に」

「それが余計なお世話だと言っただッ！」

突如激昂したエンタープライズにクーゴはビクッ！ と震える。

「え、エンター・・・」

震えるクーゴを、エンタープライズは自分の中に残る小さいながらも鋭利な牙を向ける。

「私は戦いの中でしか生きられない艦魂だ。戦いの中で生きる事こそ、私達艦魂の存在意義。兵器の魂でしかない私達は、戦う事が宿命であり、責務だ。だから、無意味に生き残って記念艦になる事は最大の恥でしかない。クーゴ、お前は私に生き恥を晒せるつもりか？」

「そ、それは・・・」

「お前の気持ちは、正直嬉しい。だが、私は騎士だ。死に様を晒すような事だけは、やめてほしい」

「エンター・・・」

エンタープライズは口元にほんの少しの笑みを浮かべ、小さくつぶやいた。

「私は、死ぬのなら、きれいに死にたい」

そんなエンタープライズの言葉に、クーゴはうつむいて沈黙した。冷静になって考えると、自分は本当に彼女の為を思って行動して

いだろうか。ただ単に自分のわがままではないのか。

彼女に傍にいてほしい。彼女の傍にいたい。

そんな自分のエゴで、彼女を助けようとしたのではないか。

否定はしない。

自分のわがまままで行動していたの事実である。

それでも彼女に生きていてほしい。その気持ちだけは本気である。でも、自分のわがまままで、彼女の誇りを汚す事は、絶対にはいけない。

それが、彼女に対する愛の形である。

うつむいたまま沈黙するクーゴにエンタープライズは少し言い過ぎたかなと心配する。

「く、クーゴ？」

「わかった」

「え？」

次に顔を上げた時、クーゴの表情は優しく笑みを浮かべていた。

「僕、保存会を脱退するよ」

「クーゴ・・・」

「いくら君に生きていてほしいと思っても、その犠牲で君の誇りだけは汚したくないからね」

クーゴの笑みに一瞬エンタープライズは安堵したが、すぐに気づく。

細められた瞳の奥に、暗い哀しみの色が宿っている事に。深い懊惱あうのうの影が落ちている事に・・・

「クーゴ・・・あなた・・・」

彼の気持ちを感じ取り、エンタープライズはうつむいた。

彼は、自分の気持ちを殺してでも自分を思ってくれている。

本当は私に生きてほしい。私と一緒にいたい。私を愛したい。そう願っているのだろう。その気持ちは自分も同じだ。でも、彼は自分の誇りを汚したくないが為に必死になって自分の気持ちを抑えている。それが自分と彼を繋ぐ想いだとしても、彼は必死に抑えてい

る。

その気持ちは一体どれだけ辛いのだろう。それでも、彼は必死になつてそれを心の中だけに押しとどめている。

自分なんかの為に、あんなに哀しい瞳をしている。

そんな想いが、エンタープライズの胸を苦しめた。

「クーゴ……」

「何だい、エンター？」

エンターの声に、クーゴは優しく微笑んだ。

一辺の濁りもない、いつもどおりの笑顔だった。いつもどおりのクーゴだった。

だからこそ逆に痛ましい。どれほどの心痛を胸に秘めて、どれほどの悲哀を押し殺して、彼はこの笑顔を向けてくれているのだろう。いつだってそう。

初めて会った時から、彼はいつだって優しく笑っていて。いつもエンタープライズを慰めてくれていた。

そんな彼に、いずれ消えてしまう自分は何を返してあげられるか。

「クーゴ……私は、どうすれば……いいの？」

「どうすれば……何が？」

「いえ……その……」

視線を逸らす。

どうすれば彼の辛い気持ちを和らげられるのか。いや、そもそも自分がそんな事をする資格があるのだろうか。何一つわからなかった。今まで一度だって彼を心の底から支えてあげようと思った事があつただろうか。きつとないだろう。

「よくわかんないんだけど……エンターが僕に、何かしてくれるの？」

クーゴはことさら明るい口調で言う。

返事はできずエンタープライズがうつむいていると、彼は承諾を受け取つたようだ。今度はなだめるような声で、

「じゃあ、お願いだから……今は抱き締めさせて」

そつとエンタープライズの体を抱き締める。触れてくる彼の手から、深い想いが伝わってくる・・・エンタープライズはつい甘えてしまいそうになって、首を横に振った。

「違う・・・クーゴ」

「？」

「私 あなたに、謝らないといけない」

「君が謝る必要なんてないでしょ？」

「ある。私はあなたの想いを」

「もし謝る事があつたとしても、謝らなくて、いいよ」

エンタープライズの言葉をどこまで理解したのか・・・クーゴはそう言つて瞑目し、ゆっくりと目を開けた。すぐ間近でエンタープライズの目を覗き込むようにして、イタズラっぽく微笑む。

「だつて 僕は、君が好きだからさ」

「・・・あ・・・」

それは、彼女が心の中で思っただけで口にした事のないセリフだった。彼との絆を結び続ける魔法の言葉だった。

今まで何度も聞いた言葉だったが、今まで一番優しく心に響いた。こんな素直じゃなく、あんな仕打ちを受け続けてきたのに、彼の気持ちは変わらない。

これからも一緒にいようね、そういう意味で。

あんまり嬉しくて、愛しくて、どうしようもなかった。我慢なんてできなかつた。

「・・・う・・・う・・・」

「え、エンター・・・ッ!？」

突然嗚咽を漏らし始めたエンタープライズに、クーゴが驚いて慌て始める。

「ど、どうしたの？ 気分でも悪い？」

「・・・違うよ・・・あんまりあなたが滑稽で、愚かしくて・・・つい、涙が出てきただけよ」

彼は自分と一緒にいてくれる そう改めて確信した。

例え残り少ない時間でも、彼は自分がどんなにひどい仕打ちを受けても、絶対に自分を嫌ったりしない。

そんな当たり前前の事に、今さらながら気づいた。

私は本当のバカだ・・・

彼がこういう人だって事は、ずっと前から知っていたはずなのに。今さら見直したりなんかしない。彼の全ては自分が一番よく知っている。誰よりもわかっている。でなければどうして、彼を伴侶と認めるだろう。

情けなくて、弱々しくて、バカっぽくて、どうしようもないくらい鈍くて。

「だけど 誰よりも素敵な人。代わりなんていない。」

そう、エンタープライズは知っていた。ずっとずっと昔から。きっと初めて会った時から、誰よりもよく知っていた。知っていて心の奥に秘め隠してきた。自分でも気づかないくらい深く。

「クーゴ・・・」

「何・・・エンター？」

エンタープライズは、彼のすぐ傍で、ぺこりと頭を下げた。

「不束者ですが・・・これからも、短い間だけど、よろしくお願いします」

顔を真っ赤にさせながら言った彼女の一世一代の言葉に対し、クーゴは唇で返してきた。

## Chapter 5 Forever Love

それから、二人は今まで以上に強い絆で結ばれた。

幾度となく季節が巡り、時が流れても、二人の絆は揺れる事はなく、むしろさらに強く結ばれていた。

そして、ついにエンタープライズに最後の時が来た・・・

ドックの中に鎮座する『エンタープライズ』の艦体はもうほとんど解体され、当初の勇ましい面影はもうほとんど残っていないかった。かつて勇ましく艦載機を蒼穹の空へ舞い上げていた飛行甲板はすでに全て取り払われ、二人は飛行甲板の下の艦首にあるポールの下で見詰め合っていた。

「エンター・・・」

今にも泣きそうなクーゴの目の前にいるエンタープライズはすでに向こう側が見えるほど透けていた。

最期の時が近い事を、物語っていた。

透けた手を、そっと愛する彼の頬に当て、エンタープライズは小さく微笑んだ。

「クーゴ・・・今まで世話になった。現世では、いい夢を見せてもらった。貴様との絆は、絶対に忘れないから・・・」

エンタープライズの優しげな笑みに、クーゴは小さくうなずく。

「ああ、僕も忘れない。《エンタープライズ》という女の子を愛した事を、絶対に忘れない」

クーゴの言葉に、エンタープライズは「はあ・・・」とため息を吐いて苦笑する。

「どうせ・・・今さら、忘れると言っても無駄なのだろう？」

「もちろん。さすがに僕の事、もうわかるんだ」

「一体何年の付き合いだと思ってるのよ」

そう言っただけ口元を吊り上げて笑う。その笑みにクーゴも微笑んだ。これで最後になる。

そんな悲しい思いに、クーゴは胸が押し潰されそうになる。本当は、ずっと傍にいてほしい。

ずっと彼女を抱き締めていたい。

そう願うが、それは叶わぬ願いであると同時に、彼女も望んでいない。

クーゴは静かに目を閉じた。

僕は、エンターを愛している

誰よりも幸せになってほしいと思うし、いつまでも一緒に居続けたいと願っている

けれど・・・それも叶わない夢でしかない

現実には、受け止めるしかない

でも、それ以上に、辛いけど、してはならない事がある

本当に彼女を愛しているなら、それは違う

過酷な戦いを生き抜き、戦い抜き、それでも普通の少女のように笑えるエンターを・・・愛した・・・

彼女の騎士としての誇りを、汚す事だけは・・・

絶対にしてはならない

再び目を開いた時、その瞳には決意が宿っていた。

「エンター」

不思議そうに首を傾げるエンタープライズに、クーゴはそっと聞く。

「何？」

「君は、僕の事を愛しているかい？」

彼の言葉に、エンタープライズは頬を赤く染めながら小さく笑った。

「何を今さら、答えなどわかっているくせに」

エンタープライズは外見の年相応の少女のように恥ずかしそうに顔を赤らめたまま微笑み、静かに宣言した。

「クーゴ・・・あなたを、愛している」

その言葉に、クーゴは微笑んだ。

その瞬間、柔らかな光が、エンタープライズの小さな体を包んだ。

「エンター・・・ッ！」

「どうやら、もう・・・お別れのようだな」

最期だというのに、エンタープライズは優しげな笑みを崩さない。そんな彼女の笑みに、クーゴは涙を流す。

「何泣いているんだ。情けないな」

光る手で涙を拭おうとしたが、その手は彼の頬をすり抜けてしまった。一瞬だけ、エンタープライズの顔がゆがんだ。

「・・・もう、触れる事は、できないのか」

「エンター・・・」

「そんな顔するな。お前はこれから、国の為に奉仕しなさい。私は、そんな貴様を、いつまでも《監視》してるからな」

その言葉に、クーゴは苦笑した。

「ここは普通《見守ってあげる》じゃないの？」

クーゴの言葉にエンタープライズは呆れたように首をすくめる。

「《監視》だ。見守るなんてそんなひ弱なものではない」

「ふっ、お前らしいよ、本当に」

「それはほめていいのか？ それともバカにしているのか？」

「ほめてるさ。本当にお前らしい」

「そうか・・・」

徐々に消えるエンタープライズの小さな体を、クーゴはそっと抱き締めた。

もう感触は感じられないが、心にはそっと、優しく、暖かなものが流れ込んでくる。

「エンター・・・愛してる」

「ああ、私も、愛している」

その言葉の後、二人は互いに目をつむってキスをした。

再び目を開けた時、そこに彼女の姿はなかった。

光の粒子がゆっくりと空に昇っていくのを見て、クーゴは優しい笑みを空に向けた。

「エンター。僕は君の事を、絶対に忘れない。だから、君も僕の事を忘れないで、《監視》しててね」

どこまでも澄み切った蒼い空を、クーゴはいつも見上げ続けた。

一九六〇年五月、日本機動部隊の宿敵にして日本海軍を滅ぼし、アメリカ合衆国を勝利に導いた歴戦の英雄空母『エンタープライズ』は完全に解体され、永遠の眠りについた

## エピソード

一九六一年のクリスマス、ホワイトクリスマスには全く無縁のように晴れ渡った太平洋の海を一隻の超大型空母が翔けていた。

新品である輝かしさを放つその空母はアメリカ、強いて言えば世界造船技術の粋を結集させて完成したその空母は、かつて日本の二つの地方都市を滅ぼした核兵器の技術を転用した原子力エネルギーを動力にした世界初の原子力空母である。

時代の移り変わりで、航空機もプロペラ機からジェット機に変わり、飛行甲板もアングルドデッキという直進滑走路と斜進滑走路の二本を装備した形に変わり、戦中や戦前の空母とは異彩を放っていた。そんなアメリカ海軍が世界に誇るその超大型原子力空母の名は

空母『エンタープライズ』

先月竣工したばかりの超大型原子力最新鋭空母『エンタープライズ』はアメリカ太平洋艦隊の旗艦として華々しい誕生を遂げ、今では毎日任務に励んでいる。

そんな『エンタープライズ』の艦橋では生き生きとした兵達がきびきびと動き回っている。

新鋭空母に配置されたという事で全將兵の士気は高い。

そんな中、コーヒーを飲みながら一人の男が手元の資料を見詰めていた。

「フォックス航海長！」

フォックスこと クーゴ・F・フォックス中佐の腕に、まだ幼く、金色の髪をちょこんと昆虫の触覚のような小さなツインテールにした金髪碧眼の少女が抱き付いた。

少女を見てクーゴは優しく微笑む。

「何だい エンター？」

少女 エンタープライズは満面の笑みを浮かべてクーゴに抱き

付いて離れようとしなさい。

彼女はこの原子力空母『エンタープライズ』の艦魂である。

そんなエンタープライズを見てクーゴは頭を掻いた。

「同じ《エンタープライズ》でも、まったく似てないよね」

そのクーゴの何気ない言葉にエンタープライズは不機嫌そうにぶうと頬を膨らませる。

「航海長。私は私。エンタープライズさんはエンタープライズさんだからね。比べるなんて嫌。航海長の事・・・嫌いになっちゃおう？」

「そうだね。ごめんごめん」

クーゴは小さく笑みを浮かべて謝る。

どうもこの子は前のエンタープライズと比べられるのを極端に嫌がる。昔の英雄と今の自分を比べられるのが嫌なのだろう。父親が偉大でその息子がまわりに父親と比べられるのを嫌がるあの現象だ。

そんなエンタープライズを見てクーゴは苦笑いした。

エンタープライズと別れてから、順調に昇級したクーゴはついに新鋭空母の航海長を務めるまでになった。

仕事は大変だが、自分の仕事に誇りを持っているのでそれほど辛くない。それに今ではこんな娘のようなかわいい女の子の面倒を見る保護者役でもある。

多くの部下を従え、今を生きている。それに

「えへへー、航海長お」

エンタープライズは頬擦りしてクーゴに甘える。そんな彼女を見て自然と笑みが零れる。

「ははは、本当にお前はかわいらしいな」

「おいクーゴ。それは世間一般ではロリコンって言うんだぞ」

その声に振り返ると、そこには三人の少女が立っていた。三人とも昔よりは成長しているが、まだまだ少女である。

そんな少女達を見詰め、クーゴはため息する。

「お前らなあ、少しはおとなしく自艦にいるよ」

クーゴは呆れたように少女達を見詰めると、三人の少女の仲で一番年上の少女が不機嫌そうに腕を組んでクーゴを睨む。

「余計なお世話だ」

「姉さん。言葉を慎みなさい。申し訳ありませんフォックス中佐」

「お兄ちゃんツ！」

三者三様の少女達は、かつて太平洋戦争の時にエンタープライズの腹心として共に太平洋の海を翔けた空母『エセックス』、『ヨークタウン』、『ホーネット』の艦魂だ。

言葉遣いが悪いエセックスをヨークタウンが怒るが、当のエセックスは全く聞く耳を持たず馬耳東風状態。業を煮やしたヨークタウン渾身のパイルドライバーが炸裂すると、さすがのエセックスも素直に従った（痛いから）。

一方、前の配備先だったホーネットはクーゴにピヨンと抱き付く。

「えへへー、お兄ちゃん大好きい」

「こ、コラッ」

もう《お兄ちゃん》なんて言われる年でもないクーゴは呆れるが、もう慣れてしまった。

何度も「せめて《兄さん》に変えて」と言ってきたが、この甘えん坊が聞くはずもなく、そのままだったらと今に至る訳だ。

「えへへー、大好きだよ、お兄ちゃん」

満面の笑みでクーゴに頬擦りして甘えるホーネットを、じーっと睨むエンタープライズ。

「ホーネットさん」

「なあに？」

「恥ずかしくないんですか？」

「何が？」

「その年で《お兄ちゃん》なんて言つのがです」

「え？ そつかな？」

「自分の年を考えてください」

「うーんっと、十七歳？」

「年齢的にはまだありなんだよな」

クーゴのツッコミに「むぐぐ・・・ッ！」と悔しそうにホーネットを睨むエンタープライズ。

「と、とにかくッ！ 航海長は私の航海長なんだから、近づかないでくださいッ！」

その攻撃的な言葉にホーネットの中でブチンッ！ と何かが弾けた。

「何よッ！ お兄ちゃんに甘えるのがどうして悪いのよッ！ 私達はあなたとは違ってもう十年以上のお付き合いなのよ？ お兄ちゃんの事は、私がよく知ってるわ」

「・・・十年以上の仲なのに、いまだ進展がないんですか？」

くすくすと笑うエンタープライズに対し、ホーネットの中にわずかに残っていた理性が吹き飛んだ。

「新米が調子に乗るなあッ！」

「おばさんは引ッ込んでください。ねえ、航海長？」

「ムキッッ！ お兄ちゃんからも言ッつてよッ！ 邪魔だから近づかないでッッ！ それと私はおばさんじゃないよね？」

言い争いを始め、五秒後には取っ組み合いのケンカに進展した。

なんと早い展開だろうか。

エセックスとヨークタウンが慌てて止めに入るが、頭に血が上った二人はなかなかケンカをやめない。

そんな四人の喧騒を一瞥し、クーゴはそつと艦橋を離れ、艦橋露天上部にある回転式レーダーに上がった。レーダー技術が発達した今では、防空指揮所なんて物は不要で、ここはあまり使われる事はない。

クーゴはどこまでも続く蒼穹の大空を見詰めた。

どこまでも蒼く、どこまでも澄んだ空は、まるで彼女の所にも繋がっているような錯覚を覚える いや、もしかしたら、本当に繋がっているかもしれない。

この空の向こうで、彼女は生きている。そう、信じている。

かつて自分が愛し、そして今も愛し続けている少女は、航海長にまでなった自分をどう思うだろう。

きつと、また素直じゃない言葉を吐くに違いない。

頬を桜色に染めながら、言ってる事と反応が正反対になるのが彼女だ。

色々と考えていると、小さく笑みが浮かんだ。

彼女との思い出がある限り、自分は前に進み続けられる。

彼女の過ごした日々があれば、どこまでも走り続けられる。

これから一体どれだけの月日が流れようとも、例え、時が経つにつれて、彼女の姿や声を忘れても、彼女を エンタープライズを愛したという事実と気持ちだけは変わらない。

どこまでもどこまでも蒼い空を見上げ、クーゴは微笑んだ。

「なあ、エンター。今日も僕の事を、《監視》してるのかな？」

柔らかな風が吹き、そつと頬を撫でる。

きつと彼女は、今も自分を《監視》しているだろう。

だったら、今言う言葉は一つだけ。

「エンター。僕は世界で一番に君を愛してる。そして メリークリスマス」

クーゴは蒼穹の空を見上げ、静かに敬礼した。

## エピローグ（後書き）

今回の作品も前回に引き続いて話別に分かれて読みやすくなっています。

艦魂年代史外伝シリーズ恋愛部門最高傑作と言っても過言ではない完成度となっています。

今まで戦記系ばかりだったので戦記系が好きな人にとっては少し詰まらないかもしれませんが、外伝シリーズを締め括るには最高の出来だと自分は思っています。

金剛の気高さと榛名の力強さを足して二で割ったような艦魂年代史シリーズでも上位に入る人気キャラであるエンタープライズの最後は感動的になりました。

本当はエンタープライズというキャラに恋愛を混ぜるのは少し抵抗はありましたが、この方が最後には相応しいと思ってこうしました。おかげで、外伝シリーズ最終作には十分過ぎる作品となりました。エンタープライズの想いは、今も気高く、そして力強くあると思います。

今回前半にヤケにエ アネタが多かったです、特別深い意味はありません。

ただ何となく最後はエ アネタを多めに入れたかっただけですから。あと背景の色をまた変えました。

今回は柔らかな青色系にしました。この方が落ち着きますから。

さて、次回作は艦魂年代史シリーズ最終作。

艦魂年代史 恋する乙女は大艦巨砲主義の直接続編として描かれています。

次回作を読む前に、必読シリーズがあります。

必読

艦魂年代史 恋する乙女は大艦巨砲主義（当たり前ですが）

艦魂年代史外伝 星になってあなたを見守って（翔香関係で）

艦魂年代史外伝 大好きな 私の大切なお兄ちゃん（隼鷹関係で）

補足の為に読んだ方がいい作品

艦魂年代史外伝 死の桜は咲かせない（信濃と直輝関係で）

艦魂年代史外伝 あの空の向こうに（雪風の現状について）

艦魂年代史外伝 十五乙女の儂き命（葛城関係で）

艦魂年代史外伝 恋する英雄王エンタープライズ（クーゴ来日関係で）

以上の作品を呼んでおけば、次回作は全て理解できると思います。

最終作の設定ですが、舞台は戦後九年後の新発足した海上自衛隊の呉基地。

自衛官になった翔輝と護衛艦の艦魂、そして、瑠璃など様々な思いが交錯する中、再び戦姫達が舞い踊る。

艦魂年代史シリーズ最終作。

メインキャラのオールスター作品としてシリーズの最後を締め括ります。

現在執筆中ですが、クリスマスイヴかクリスマスに投稿する事を目指して書いています。

次回の最終作もどうか最後までお付き合いください。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2440d/>

---

艦魂年代史外伝 恋する英雄王エンタープライズ

2008年8月29日17時43分発行